

てそれは一律の「世間」ではなく、異なる「世間」同士の交流によつて絶えざる意味の変容が起こっていることを確認しなければならぬ。イタコのカタリは前代の残存ではなく、同時代の需要に応えたものであること、またいつの時代も巫女たちが同時代の需要に応え続けてきたことを忘れてはならない。

注

(1) 「世間」と「準抛集団」の関係については、井上忠司『世間体』の構造』（日本放送出版協会、一九七七年）を参照のこと。

(2) 佐々木達司、山田巖子の『新青森市史 別編3 民俗』（青森市史編集委員会編、青森市、二〇〇八年）の口承文芸調査による。

(3) 桜井徳太郎『日本のシャマニズム』（上）（吉川弘文館、一九七四年、三一九頁、四三六〜四四〇、五八二頁）を参照。

（付記）

本稿は、山田巖子「巫女と戦争―東北における危機のフォークロア―」『国文学 解釈と鑑賞』七三巻八号（至文堂、二〇〇九年）及び『第二次世界大戦下のオシラサマ信仰と民間巫者』平成一九年度〜二一年度科学研究補助金（基盤研究（C））研究成果報告書（二〇一〇年、弘前大学）の一部を再構成し加筆訂正したものである。

（やまだ・いつこ／弘前大学）

シンポジウム／「世間」という問いから

## 言葉にされた世界観

―世間のすり合わせとしての世間話、あるいは伝説―

野村 典彦

### 1 峠を越える

近代の国づくりがトンネルという形で人々の視界を変えてゆく中で、柳田國男は峠を思う言葉を幾度か漏らしている。「日本は珍らしく、峠路の多い国であったのだが、便利がよくなつて却つて大部分が不用に帰してしまつた。山一重を隔てた二つの土地の消息は、まはりまはつてしか伝はつて来ず、まして双方を比べて見ようとするとするやうな旅人は、もう稀々にも通つては行かない」（柳田國男『北国紀行』「自序」一九四八）。紀行文集の冒頭に置かれた情緒のある文章にもみえる。しかし、峠から見ることを含む十か条を父親から授けられた宮本常一（宮本常一『民俗学の旅』一九七八・文芸春秋社）を筆頭に、「双方を比べて見ようとするとするやうな旅人」こそ、民俗学という学問に携わつてきた人々だったということが可能だろう。トンネルが開通する以前のムラの暮らしを大切なものと考えていた旅人た

ちだ。もはやトンネルをくぐらずに訪ねることは叶わないのだが、こうした旅人を、採訪者と呼んでおく。

本稿では、採訪者としての私に向けられた言葉の中から「世間」を考えてみる。

## 2 「信用」という「世間」

まずは、一九九六年夏に福島県中通り地方で出会った一九二九年生まれの男性A氏の言葉である。(この人物からの聞き取りは、テープ起こし資料として『世間話研究』第九号に掲載している。)

【テープ起こし資料1】俺は、それ、農協さいったからね、だから村の人ら、だいたい俺のこと知らねえ人ねえ。俺知んねえ人でも、あつちは、みんな俺のこと知ってる。だから、俺は機械なんて我が、持ってねえんだ、全部、人にやってもらってる。それだけ信用、我が事そういうふうに言ってるんだだけつちよも、信用あんだよね。「やってくれっか」って言うのと、「んー、わかった」って。だから、うちでは機械持ってねえんですよ。

A氏が生まれる直前にこの土地に両親が移ってきたという事情もあり、A氏が若い頃、そして農地解放の頃、地主のみならず他の村人とこの人物との関係が円満なものであったとは言い

がたい。だから、次のような言葉も発せられてしまう。

【テープ起こし資料2】「大名とワラ名の差がある」ってのは、ワラ名っていうのは、稲の実を落とした、ワラ、あれを積んで置くのがワラ名。だから、それが「大名とワラ名の差がある」っていうのは、その昔は貧富の差があったということね。そうすると、それがあるということに対して、その農村というやつは、うんと差があったっていうね……。大名っていうか、「ふくし人」は威張ってた。貧乏な人は下にいて、何言わっちゃって我慢してた。でねえと生活ができねえの。だから、今言った土地だって、「あの野郎に貸さねえ」っていうてえと、百姓できなくなっちゃうまうばい。「土地よこせ。俺の土地だからよこせ」って言われると、取り上げられんですよ。すつと百姓になんねえから。そつと、俺は、学校二三年から、地主来つちつと、あの人は何だべな、俺家さ土地貸した所、取っ返しに来たんでねえか、なんて、そういうこと考えて寝てたからね。そうして、その地主の人が帰ってくまで寝らんないで聞いているわけだから。あの人は我家さ土地貸しているんだけんとも、土地返してくれよって来たのかな、そういうこと思うわけだ。そして、その人が、土地返せって言わねえで行くと、せいせいして眠ってたってわけだ。俺は学校二三年から、そういうことやってた。だから、うんと人悪いぞ、俺は(笑)。ひとまず、人を疑っからね、本当には信用しねえから、でねえと生きてこられなかったのね、昔は。

農林年金を受け取りながら余裕のある暮らしをしている現在からかつての暮らしを回顧し、数時間後には村の外へと出てゆく探訪者に対して発せられた言葉である。脚色もあるだろうし、辻褄の合わない要素もあるだろう。しかし、人生の物語の中に「世間」を考える手があることを教えてくれている。地主や近所との関係に苦勞した後、農協の仕事を通じて村の中に広く知己を得ているA氏が「世間」を見渡す際に大切にしているものが「信用」なのだということができよう。

### 3 「よそ」という「世間」

牛も腹まで潜ってしまう田に、A氏は渡り木を置き（＝沈め）田植えをしていた。かつてはそうした湿地であったこの地域で、A氏宅を出た後、一九三〇年代前半生まれの男性B氏の話を知った。「東京の黒い道路」と題して『世間話研究』第九号に紹介したテープ起こし資料を部分的に抜き出して示す。

#### 【テープ起こし資料3】

◎俺は、ここで雨降つと、□□（JR線の駅のある町）に行けなかった。

◎昔、六年の時に綴方に書いたけれども、雨降つても□□さ行かれるような時代が来ればいい。

◎俺の親父さんちや、よく年に三回ほど東京行つたの。行つて、「東京には黒い道路あんだ」。今、このアスファルトのこと言っただな。

◎東京の話、ひと月語り語ってる。「東京には黒い道路あつてよ、しかも、下に素っ晴らしい丸い管が入ってる」。下水道だな（笑）。それでも、今から六十年くらい前のここでは考えられねえ、黒い道路つて何だかわからなかつたんだ、俺。このアスファルトのこと言つたんだな、つてのは、初めてここにアスファルトが来た時、思つたの。

◎「素晴らしい真っ黒い道路に、そういう管がある」つて、考えられねえ。今の子供達は、それ、テレビで何でも見てつから、そんなこと言つたつて興味もあれもねえけども、俺の親父ら、東京さ行くと、ひと月東京の話してただよ。

「ひと月語り語ってる」と想起される東京の話。実際にそれがアスファルト舗装であつたか否かは問題ではない。駅から汽車に乗って出かけてゆく父親は、「世間」を持ち帰ってくる。雨が降れば行けなくなつてしまう駅の方角を眺めては「何だかわからなかつた」道路のある東京の景色を想像したことだろう。「今の子供達」のテレビと対置される、父親の土産話は、かつての子供達に「世間」を想像させるものだったはずだ。そして今、よそからやってきた探訪者の前で、耕地整理された田んぼを透かして、かつての雨の日の景色を見ている。

#### 4 難所という「世間」の焦点、

##### 出荷・肥汲みという「世間」

よそに出かけていった記憶もしばしば言葉にされる。

一九九五年に神奈川県川崎市内を歩いた際の資料に、取引先や市場へ荷車を牽いたことを想起する言葉がある。例えば、一九一〇年生まれの川崎区の男性C氏が関東大震災後、家の手伝いをし始めた頃の道のである。

【テープ起こし資料4】行きはね、あそこの札の辻（東京都港区）から左曲がってくとね坂が。上りは登っていいけど下りは危ないから……。今の東京タワーがある芝増上寺の山内を、こう回って、ちょっと大回りだけど。飯倉の坂って坂あったの、札の辻から左曲がってくと近いんだけどね、すごい坂あったの。「あそこは危ないからな、芝山内行け」って、遠回りだけど、ぐるーっと。そうすると坂がないの。〔28 学校が倒壊し、家の手伝いを始める〕（『川崎の世間話』の一部）

想起される空間的な広がりの中に「すごい坂」「危ないからな」という言葉によって、難所という焦点が作られている。「狐に化かされた話」が世間話を代表するものとして捉えられていることについても、難所という「世間」の焦点としてその場所

の体験を聞き取ってみる必要がある。（参考・拙稿「狐に化かされたという事故の話」『世間話研究』第十一号・二〇〇一）

一九一八年生まれの川崎区の男性D氏も、荷車やリヤカーに野菜を積んだ重さとともに市場への出荷を言葉にする。

【テープ起こし資料5】うちなんかでもね、品川あたりまでは……。野菜も作ったからね、蓮根だのね、玉ねぎだのね、何でも野菜作ったからね。品川ぐらいいまで後押しに行っただすよ。親父の後付いて。我々が行った時分には、もう荷車じゃなかったね、子供の時分ね、小学生なっただからリヤカーで。リヤカーでもね、あれがあっただよ、チューブが入ってねえ、無垢のタイヤね。あれのリヤカーが一頻り流行って、あれでもって持っただ。それでも荷車よりは楽だったけどね。だから、大森の市場、それから品川ね、蒲田ね、みんなあっただね、市場がね。川崎にもあっただね。近い所はどうしても安いってんでね、荷が大量に集まっちゃうからね、川崎あたり。横浜へも持っただね。みんな、だから、リヤカーで持っただね。〔野菜売り〕『世間話研究』第九号）

子供時分に荷車の後押しをして出かけて以来の、出荷先という「世間」が、地名によって描かれる。多摩川を渡し場で渡り、現在では空港線と呼ばれている電車に沿ってD氏は蒲田に出た。生活範囲の地図が描かれているだけでなく、「近い所はど

うしても安い」というように、相場という「世間」が、農家を  
取り囲んでいたことも浮き上がってくる。「川崎の世間話」に  
は、こうした資料を中原区の事例でも取載した(22 野菜を  
出荷する)。また、川崎区の農民が下肥を汲みに行くという「世  
間」を持っていたことも紹介した(23 これは本当の水増しだ)  
「53 なにしろ人糞がないんだから」。そこには、横浜の外国人  
は肉食をするので下肥が良質であり、女工たちがろくな物を食  
べさせられていなかったので富士紡績の肥は効かないと「世間  
話」が織り成されていた。ちなみに東京都江戸川区の住宅地に  
育った私は、家族に糖尿病があることを肥汲みに来た人に教え  
られる、という言葉をしばしば聞いた。総武線の電車が黄色い  
のは肥をかけられてしまうからだ、との話は、「おわい舟」と  
いう言葉が生きていた地域から都心に通勤する人の「世間」だっ  
たか。西武線の沿線や南武線の沿線でもなされたはずだが、電  
車がチョコレート色の頃にはなりたない話だ。

## 5 誉れを得る場としての「世間」

市場に車で出荷するばかりが農家の「世間」ではない。  
二〇〇四年、岐阜県加茂郡八百津村で出会った一九二〇年生ま  
れの女性E氏の言葉を拾ってみたい。なお、この聞き取りにつ  
いては『世間話研究』第二十号に、テープ起こし資料として報  
告している。

夫婦は各務ヶ原市で生活していたが、舅が脳溢血で倒れたこ  
ともあり、空襲で負傷した夫は戦後、生家で農業を始める。

### 【テープ起こし資料6】

◎野菜、お父さんが作らっせるもんで、私が……。一番初めは  
籠背負って、電車があつたもんでね、八百津線、今、無うなっ  
たけど。売りに行くと、「こんな良い野菜が、こんなとこ、取  
れるか」ってね、言われたくらい。

◎駅下りると、□□って、東の方に旅館があるね。今は、今も  
名鉄が買ってやってみえるか、どうかな。そこへ行くと、お客  
さんがあるもんで、私、「おばさんいいよ、みんな買ったるよ」っ  
てね、買ってもらえて。それが嬉しいてね。それがきっかけで  
ねえ、残ると八百津駅、八百津の下町へ売りに行った。おかげ  
でねえ、順番、顔知れて……。それから兼山まで。住宅ね、あ  
そこも行つて。

◎まあ、自転車乗って、ちゃああ、籠付けて売りに行った。し  
まいにはもう、リヤカー引いて行きよつたよ、私。リヤカーに  
いっぱい持つてくとね、売れちゃうの。新しい……。今の□□  
病院つてね、あるやろね、ま、今、救急病院やら、どうなつた  
か知らんが。そこへ行くと、患者さんがね、待つとるの、私の  
トマトを。うん。うん、「おばさん来よる」、兼山行つても「お  
ばさん来よる」つて。ほんで、トマトを箱に入れてね、持つて。  
トマトからね、梨とか、芋。それが嬉しいてねえ。うちも助か

るわね。私がそうやって、子ども高校出して……。

※ 野菜を売って子どもを学校に行かせた話から、長男を亡くした後、娘が隣へ越してきて面倒をみてくれているという話になる。

◎あの姉ちゃんは、兄ちゃんがおらんようになったもんで、子どもまた大きくなったもんで、ここへ来て、今。私は前のうち、姉ちゃんはこっちにおる。食事は一緒に食べたり、食べなんだり不統一やけど、ま、気楽にね、今おるけどもね。昔のこと思ったら幸せよ、私は。

あのね、若い頃、柴刈りに行かなあ。ガスも何も無あて。山へ柴刈りに行ったよ。

◎ここらは、柴木って、三束背負って、谷のいる、ようよう下りて来て。ほっと、お母さん言わつせる、「よその人は、四シヨウさつするぞ」って。四シヨウてことは、四荷作って出す。十二束やね。私はようよう三束作って、九束やる。ほいで、柿の木が、元、うちの前へ、大きな柿の木、どこでもミヨウタンって柿の木があつたのよ。そこに腰掛けとつたら、小姑が来た時に、おばあさんに言わつせる、「あの長やああ柴、見よ」と。皮肉のこと言わつせる。長けりやあ燃えでがあるわね。燃えでつてことは、ようけ焚けるってことやわね。そりやまあ、小姑って、今は、そんな変なこと言つたら、嫁さん出てつちやうやる。そやけど、私みたいなもんは、こういつたもんは、我慢して辛抱したんやけのう。そりやまあ、ほりやあ姑は嫁いじめやな、昔は。

それも、中には良え人もあるやりやあが、嫁いじめやね。そりや、今、何か話すと……。

野菜を小売りする意識を持たない夫に対し、この女性は「作つたやつをさばいてこそ、お金になる」と、小さな現金収入を積み重ねてゆく。「今日の売り上げはいくら」と帳面につけるのを「楽しみ」にしていたそうである。「世間」は所得を得る場であり、喜び楽しみを得る場であった。そして、「こんな良い野菜」という言葉、すなわち農家としての誉れを得る場であった。（農家が市場で誉れを得ている発言は『川崎の世間話』に中原区の事例を「48 野菜を作る」として掲載している。）

ここでA氏を思い出しておきたい。近隣との関係に苦しんだA氏が農協に出て働く中で築いていった「信用」、姑・小姑との関係に苦しんだE氏が野菜を売りに行く先で感じた喜び。ムラの中よそ者、家の中よそ者が、よろこびや誉れを得る場としての「世間」がそこに見える。

## 6 言葉にされた風景

A氏宅の居間に通され、湿田の記憶に先行してまず話題になっていたのは、「フネイガサワ」という地名などの由来とともに語り継がれる沼地の景色であった。まるで幼少の頃の記憶のように言葉にされていくその風景は、実はA氏が生まれるはるか

以前のものであった。「むかしの暮らし」を聞きにきた探訪者との「世間」のすり合わせを始めようとする手探りは、まず眼の前にある風景の奥行きであったのである。

探訪者との言葉のやりとりもまた、「世間」のすり合わせである―「民俗調査は「声」をもとになされるといふ当たり前の現実」という言葉（山田巖子「口承―口承」研究の展開―『日本民俗学』第二三九号・二〇〇四）を私なりに受け止めた表現であるわけだが―と意識した時、探訪者に対して言葉として発せられる伝説についても、目の前にある風景の奥行き、あるいは「世間」に焦点をつくる言葉として考える必要が生じてくる。

「かたり」である昔話とは異なり、伝説をテープ起こし資料として提示することには困難が伴う。テープ起こしをしてみれば、その扱いづらさが「雑音」の多さにあることに気づくだろう。場所の説明、家の説明、教科書に載っているような歴史との接続。媒体によって表出の仕方を変えることはまず押さえておかなばならないが、声として表現される時（あるいは《趣味》豊かに文字にされる時にも）、伝説は現在の地域の状況と重ねられて説明される。探訪者との「世間」のすり合わせが行なわれる中で、現在の眺めの向こう側に、伝説を焦点としてその村の風景が描かれ、村の外側に広がる「世間」が引き出されていくのである（例えば、飯倉義之責任編集『富浦のはなし』（国学院大学説話研究会編・二〇〇二）所収「日蓮伝説（法華崎の由来）」がわかり易い）。

## 7 むすび

「世間」はおそらく規範を要求してくるものである。世間話とは「世間」をすり合わせることによって行なわれる《理》の確認であり、《律》の発動である。同時に、各人が生きていく上で支えとなるものを求めてゆく場、あるいはこれまであゆんできた人生を肯定する場として「世間」があることを指摘してむすびとする。

※ 紙幅の都合により本稿ではテープ起こし資料の一部分を抜き出して提示している。それらの発言を導いた文脈については、以下を参照されたい。

『川崎の世間話』一九九六・川崎市市民ミュージアム

拙稿「自動車が走る暮らし―道路・生活・世間話―」（『世間話研究』第九号・一九九九・世間話研究会）

拙稿「資料報告 岐阜県旧可児郡にて」（『世間話研究』第二十号・二〇一〇・世間話研究会）

（のむら・のりひこ 千葉大学非常勤講師）